



『一步一歩進もう』

~Let's Move Forward Step by Step~
東京六本木ロータリークラブ会長

TOKYO ROPPONGI ROTARY CLUB

WEEKLY REPORT

東京六本木ロータリークラブ



『ロータリーは分かちあいの心』

～Rotary Shares～
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年3月17日

No. 28

平成20年3月3日

卓話 『今からでも遅くない—人生改革のすすめ—』
ダイヤル・サービス株式会社 代表取締役社長・CEO

今野 由梨 様

皆さんこんにちは、今野でございます。私の72年の人生には大きな転機がいくつかあったと思いますが、転機というのは自分では分からないものですね。時間がたって経験を重ねて、ある日謎が解けたように、あの経験はこのことのためだったんだと気づくのです。

私は三重県の桑名のごく普通の両親から6人姉妹の次女として生まれました。母は戦中戦後の食糧難の時代に自分と他者というものを考えるきっかけを与えてくれました。父は大好きなカメラを、母は着物を売って食べ物に換えました。母はそうして得た貴重な食料の半分を、乳飲み子を抱えておっぱいが出ない町内の若いお母さんたちに配っていました。戦災で桑名が全焼した9歳の時、私は両親と離れて一人逃げ惑い、もう死ぬかと思って思わず、神様、私まだ死にたくない、もし生かしてくれたら一生懸命働いて子供が戦争で死なないような仕事をしますからと、心の中で叫びました。生きて翌朝を迎えることができた時、私は大変なことに気がつきました。相手が人間だったら忘れたふりも出来るけど、約束したのが神様なのです。

私はその日からカチッとスイッチが入って、勉強しなければいけない、アメリカでたくさんお友達を作つて戦争で子どもたちが死なないようにしなければいけない。それにはどうやら大人を説得して東京の大学に行けるのかということで親との大戦争になりました。結論から言うと大学には行ったけれど、私が目指した会社は全部男子のみで就職試験も受けさせてもらえませんでした。そのおかげで日本の女性起業家第1号という道を歩き始めることになります。だから何でも、そのとき経験している瞬間は、なんで私だけこんなことがと思うんですが、それは全て意味がある。ともかく必ず道は開けるという気持で、こうと思ったことは全部やってみました。

今私の仕事はダイヤルサービスですが、最初にやったのは「赤ちゃん110番」。1969年、日本は高度経済成長の真っ只中。若者も就職列車に詰め込まれて地方からやってくる。隣に誰が住んでいるか分からない東京で若者たちが子どもを生み、子育てが始まる。新聞は来る日も来る日も子殺しの事件を報じていました。若い母親が育児ノイローゼになって子どもをコインロッカーに置き去りにしたというような事件が相次ぎました。その当時の一般的な見方として近頃の女たちはという言葉で切り捨てられようとしていましたが、私たちの会社では、苦しくても人々から感謝される仕事をしましょうと、社員の人たちに励まされて始めたのです。

これは日本だけでなく世界でオンラインの電話相談サービスです。受話器を上げれば電話の向こうに経験豊かなカウンセラーがいて、田舎のお母さん、お姑さんに代わって相談に乗ってくれる。それを始めた日、電話局の電話回線がパンクして、私は初日からこれは法律違反であると怒られました。当時の法律では電話を使ったビジネスができるのは電電公社だけ。でももうその時は止められない。なぜなら電話の向こうのお母さんたちから電話回線をパンクさせる勢いで電話がかかってきて、止めないでくださいというんです。この辺の電電公社との対戦記だけでも1冊の本が書けるくらいエピソードがあります。その後も子ども110番、熟年110番、外国人の方々のための110番、セクハラホットライン、企業倫理ホットラインをやらせていただいております。

時間になってしまいました。今日はありがとうございました。

